

大宮を写したガラス乾板^{かんばん}

◇発見されたガラス乾板

平成27年(2015)、大宮 上町地内にあった旧家・鈴木家が解体されました。鈴木家は、江戸時代後半、部垂村(のち大宮村)の村役人を務め、安政年間(1854-60)には鈴木弥三郎が庄屋を務めました。屋敷地は現在の杉山酒店の北隣にあり、明治初年から醤油醸造業を営んでいましたが、昭和期に入り醸造業は廃絶し、解体当時は空き家となっていました。鈴木家の許可を得て、解体前の蔵を調査させていただいたところ、古文書や古民具に混じり、150枚を超えるガラス乾板が見つかりました。



▲鈴木家の蔵からの資料撤出(平成27年11月)

ガラス乾板は、明治10年代半ばに日本にもたらされた、ガラスを支持体とする撮影用感光材料です(縦12センチ、横16センチ、厚さ2ミリほどのガラス板)。撮影方法は、感光乳剤を塗布したガラス板に被写体を写し、それを鶏卵紙などの特殊な紙に印刷するというものです。ガラス乾板は湿度の高い日本国内では生産が難しく、大正期に国産化されるまで輸入品が使用されました。明治10年代頃から輸入品が出回りはじめ、明治21年(1888)の磐梯山噴火の写真が多く残されていることからわかるように、明治20年代には写真家や来日した外国人による使用が広まりました。国内の富裕層には明治30年代にかけて普及しましたが、昭和10年頃からは扱いの手軽なロールフィルムが主流となっていきました。

◇ガラス乾板に写された常陸大宮

撮影された内容については現在調査を進めているところですが、鈴木家の醸造工場や近隣の風景、家族や醸造工場の職人たちが写っていることがわかりました。カメラを持つ人物が写る乾板もあり、撮影者は鈴木家の関係者かとも思われます。また、偕楽園など旅先の風景もわずかに含まれています。撮影年代が特定できる写真は現段階では発見されていませんが、ガラス乾板が普及する時期を考慮すれば、明治時代半ばから昭和初期頃と考えられます。



▲鈴木家ガラス乾板①(醸造所の職人たち)

①の写真は、「醤油製造営業」と書かれた看板が懸かる門の奥に鉢巻きに前掛け姿の職人たちが写ります。手入れの行き届いた庭には醤油の樽も見え、出荷の風景を撮影したと思われます。手前には珍しそうに写真機をのぞき込む子どもたちが写っています。



▲鈴木家ガラス乾板②(南から見た北町の通り)

②の写真は広い道の両側に商家風の建物が並ぶ往来の風景です。左手前の商家ののれんに「鈴木」とあることから、鈴木家の店の前の通りを撮影することが目的だったのでしょうか。鈴木家の奥の二階建ての土蔵造りの建物は肥料を商った佐藤商店、その向かいには小伊勢屋呉服店(コイセヤ)で、現在の北町の通りを南から北方向に撮影していることがわかります。道の右に立てられた幟は甲神社祭礼のもので、ずっと奥にも同じものが立っています。また、火の見櫓が立っていることも確認できます。道行く人々は和服姿が多い一方、自転車が普及していることもわかります。

写真資料の少ない戦前期の常陸大宮のようすを伝えてくれる鈴木家のガラス乾板。今後は文書館で公開していく予定です。

謝辞 飯島一生さんに画像処理協力をいただきました。

【参考文献】久留島典子ほか編『文化財としてのガラス乾板』勉誠出版 2017年